



# 精神科救急の実態に迫る



## 広田和子

精神医療サバイバー&保健福祉コンシューマー



家族ももっとピアサポート活動を!と日々の活動から痛感している。家族のためのレスパイトケア、24時間対応のソフト救急相談窓口の整備など、精神科救急の課題を救急隊や警察の声もまじえながら訴える。

### レポート①

## 救急隊の切実な声 「ソフト救急ベッドを 確保してほしい」

横浜市内にあるA病院の家族会で講演したあと、私が急性期病棟の一室に入ると、そこに一組の母子がいて、お母さんが私の話をほめてくれてから、静かに娘さんのことを語り出しました。

「この子は10日間“そう状態”で一睡もしていませんでした。そしてマンションの防災ベルを鳴らしてしまったら、管理人さんが飛んできて119番通報しました。救急車がかけつけてきてくれて、娘は病院へ行くのをいやがりましたが、救急隊が30分ぐらいかけてねばり強く“医者に診てもらうこと”を

● 勧めてくれたところ、娘は先生に診てもらおう気持ちになりました…」

● 「ところがそれからが大変でして、救急隊が娘のかかりつけのこの病院へ電話してくれたところ、病院側から「もう当直の先生は寝てしまったので診れない」とことわられてしまいました。しかしせっかく救急隊が娘を説得してくれたのですから、何とか先生に診てもらいたいと私は必死でした」

● そう語るお母さんの表情から、その夜の必死さがひしひしと伝わってきました。そしてそばにいた娘さんの表情から、“そう状態”は遠い昔の話のように思えました。

● お母さんは「その時の当直の看護主任にいきさがつて「10日間も眠らなかつた娘が救急隊に説得されて、病院に

● 行く気持ちになったのですから、何とか先生に診ていただきたい。何とかして下さい」とお願いしたところ、病院が自宅で寝ていた院長のところへ電話して、真夜中でしたが院長先生が診てくれることになりました」と言った。

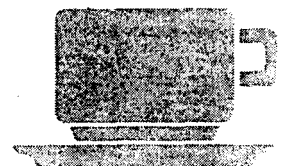
● そこに娘さんと仲よしの退院した人がやってきて「〇〇ちゃんは今もうすぐ退院できるんだよね」と言うと、ご本人はにっこりうなづいて、お母さんが「広田さん! そうなんですよ!」と言われたのでした。

● 「救急隊も看護主任も院長も、お母さんの必死さに応えたのですね。10日間も寝ていなかったのだから、本当によかった。横浜市の救急隊は本当によくやってくださっています。浜岡救急課長は熱意のある人で、そこにいる吉

### ●私の考えるソフト救急、ハード救急とは?

ソフト救急: 本人の同意に基づいて、病状が悪くなったときに医療機関にかかるための普通の救急

ハード救急: 自傷他害のおそれがあり、精神保健福祉法に基づいて措置入院になる可能性がある救急



村さんという職員が、これまた熱血漢なのよ…」と私は言いました。

以上は神奈川県と横浜市と川崎市の救急医療システムが夜間10時から翌朝8時半まで空白のなかでもA病院が自分のところの患者を夜中に診察してくれた話。救急関係者の話によれば「24時間かかりつけの医療をつくっておくことが大事…」とのこと。

### なぜ救急隊が警察に搬送?

救急隊が神奈川県立芦香病院に患者を搬送したところ、当直医より「満床(夜間・休日用のソフト・ハード共用8床)ですので警察官通報してほしい。警察へ搬送してください」と指示され

ました。そこで救急隊が最寄りの警察へ搬送して、警察署から横浜市へ警察官通報され、横浜市が受理して、ハード救急専用ベッドのある横浜市立大学浦舟病院へ警察車両で搬送されましたが、この件については救急隊も警察側も釈然としない思いが残ったそうです。聞いた私も「おかしい」と思っています。

しかしこうした話は何も横浜市内だけの話ではなくて他所でも聞く話で、「広田さん! 救急隊が患者さんを警察に連れてくるのですよ! おかしいと思いませんか?」本当におかしいと思います。

糖尿病や高血圧や心臓病の人が医療機関でもない警察に行くことはありま

せん。衛生行政関係者や精神医療や保健福祉業界の人々は「精神の病に理解を」とか「精神障害者に理解を」とさかんに言いますが、一番理解できていないのは「理解を」といっている当人たちだと思えます。

そもそも精神の病も他の病気同様にふつうのソフト救急が24時間安心して利用できるようになっていて、横浜市救急隊のように本当に患者のために受診を説得してくれれば、かなりの人はソフト救急でいけると思われます。

横浜市救急課は「とにかく、精神の人の場合、受診先をみつけるのがむずかしい。救急車に患者さんを乗せたまま、警察署の駐車場までどこにも行けなかったこともあった」と言います。

神奈川県のとある市民団体の話し合いのなかで、私が「県内の救急医療システムの時間内は救急隊は出勤しているのですか?」と質問したところ、県側は「時間内は出勤しています」と答えました。だとしたら、24時間ソフト救急システムが整備できれば、24時間、救急隊が搬送可能ということになります。

現在、神奈川県内には夜間・休日用の救急ベッドが19床ありますが、ソフト用ベッドはその中のハードと共用の8床しかありません。これは本末転倒の話だと私は思います。

表1. 救急隊が病院に搬送した件数と対応に要した時間

区分	救急隊が搬送した件数	救急隊が現場に到着してから病院へ収容した時間の平均時間(分)	救急隊が現場に到着してから病院へ収容した時間の最長時間(分)
全体	3812	22	173
1時台	274	20	73
2時台	225	21	101
3時台	167	20	67
4時台	97	19	61
5時台	76	21	46
6時台	63	23	102
7時台	78	22	66
8時台	72	24	124
9時台	117	25	153
10時台	124	22	125
11時台	130	26	137
12時台	131	24	77
13時台	118	23	87
14時台	131	26	166
15時台	141	24	85
16時台	152	23	101
17時台	142	23	106
18時台	161	23	68
19時台	169	23	112
20時台	192	23	173
21時台	217	22	163
22時台	253	21	101
23時台	293	20	86
24時台	267	20	63

資料提供: 横浜消防年報

救急隊が搬送した件数の内訳

精神障害	件数
老年期及び初老期の器質性精神病	45
精神分裂病	127
躁うつ病	144
その他の精神病	307
神経症	562
アルコール依存	271
その他の非精神病性精神障害	1,048
知的障害	3
急性アルコール中毒	1,305

2000<平12>年度に救急隊が病院へ搬送した時点でWHOの疾病分類(ICD-10)で精神障害に分類されたもの。



まず、本人の意思に基づくソフト救急システムが24時間整備されていて、家族や救急隊が説得しても、どうしても本人の同意がとれないけれど、本人の人権を守るためにもやむを得ず“ハード救急”が必要なのだと思います。

表1は、横浜市救急隊の搬送実態ですが、これを見てもソフト救急の受診先の確保が重要な課題だと思われま

## レポート②

### 今や警察は24時間 コンビニ化している！

神奈川県内には53の警察署があり、485の交番と145の駐在所があります。日本の交番のシステムは海外でも評価されており、私たち住民の安全に対する警察の役割は大きいのです。

日頃、私が相談活動等を行っているなかでの警察官との会話のなかから、警察について感じていることをお伝えしたいと思います。

#### 家族のピアサポートの重要性

警察の現場で働く多くの人の話を聞いていると「広田さん！ 家族がかわいそうですよ」と言います。そのぐらい家族が切々と警察官に訴えているのです。昔は隣近所のつきあいがあり、親戚づきあいもありましたが、今は人づきあいが薄くなっています。たとえつきあいがあったとしても、場合によっては家族の内なる偏見で打ち明けることができず、警察に相談している人も多いのです。

私はそうした話を同じ悩みを持つ家族同士が語り合えないものかと考えています。ところが、多くの患者会同様に家族会もまた、こうした日頃のピアサポートができていないように思います。おそろしく遅れている精神医療のために私のように被害を受けたり、傷ついた本人と向き合いお互いが疲れ果ててしまっているときに、同じ体験をしている家族同士が癒しあい、楽しんだりできれば、何も警察に行かなくてもよかったのでは？ と感じることも多々あります。ぜひ全家連としても、家族のピアサポートについて家族会の単会でできるような努力をしてほしいと思っています。

#### レスパイトケアの重要性

これもよく警察の現場で働く人たちのなかから聞く話ですが、「110番通報を家族から受けてかけつけると、ご本人が“ご苦労様です”と言うのですよ。家族は“今まで暴れていた！”と言うけれど、我々としては“ご苦労様です”と言っている人を保護する理由はない…」まったく警察官たちの言うとおり、保護する理由は何もないです。しかし警察官たちが帰れば、また険悪なムードになることは私にも充分予測できます。だったら、警察官がかけつけてくれたときに“ご苦労様です”といっている本人を家において、「あとをよろしくお願いします。私は休息してきますので」と言って家族が家を出ればいいと私は思っています。

家族がリフレッシュしてくれば、案

外本人の気分も変わり、お互いの関係も好転すると思うのですが、親は子どもが病気だと思っているので、子どもを入院させようとしています。しかし私が多くの相談者と会っているなかで“どっちが障害者なの？”と考えさせられることもあるし、また“自分がいなければこの子はやってゆけない”と背負いすぎている家族も多いと思います。

“この子を残して死ねない”と思う前にこの精神障害者の子ども以外に自分と一緒に暮らせる子どもがいるのか家族にはよく考えてほしいと思います。

'97(平9)年に研修にいったサンフランシスコには、アジア系の家族に対するサービスがありました。それはアジア系の家族は本人を抱え込むからだそうです。また、バンクーバーにはレスパイトケア施設(家族のための一時休息所)が存在していました。

日本でも家族のための社会資源としてぜひレスパイトケアが必要だと多くの相談者(家族も含む)や警察官と意見交換していて痛感しています。全家連には厚生労働省や地方自治体衛生行政に要望してほしいです。

#### 公的な24時間のサービスを

これもまた多くの現場で働く警察官と話して感じることで、他の行政に対する不信感が強いのです。私はその気持ちをととてもよく理解できます。ある警察に行ったらまたま目にした例ですが、「保健所に相談に行って、一緒に暮らしている人が暴れた、と話したら“それは警察に被害届を出したほう

がいい”といわれて警察にきた」とい  
う人がいました。

私はこの光景がとても不思議に思え  
ました。保健所が「なぜ暴れたのだろ  
うか？」という視点で相談者の話を聞  
けなかったのだろうか、という不思議  
さです。事実こうして他の行政が相談  
者を警察へ回してくるケースは多々あ  
ると多くの警察官は言います。これは  
他行政窓口が開いている昼間のケース  
でしたが、夜間はその保健所も福祉事  
務所もやっていないので、ときには相  
談者の対応で追われ、警察の本来業務  
である事件の解決の人手までとられて  
しまっているのです。

そうした現状を目の前にして、24時  
間対応の精神科救急相談窓口とソフト  
救急医療、ハード救急医療の確立の他  
に保健所等公的な機関の24時間体制の  
サービスが必要だと思います。地域で  
孤立して事件を起こすようなことにな  
らないためにも。

今、重大事件が発生すると、交番の  
警察官まで特別捜査本部に人手を取ら  
れるそうです。そうしたなかでも、神  
奈川県警には年間約100万件の110番通  
報があり、その他に、“警察相談”が始  
まった2001(平13)年6月～10月の扱  
いは1万5,641件にものほります。一方、  
保護も2000(平12)年度1年間で1万  
6,562件に達し、そのうち精神障害関係  
が2,070件で、衛生行政統計では約3分  
の1が警察官通報になっています。

この他に数字に入っていないような  
ことは多々あり、ある県警幹部は「自  
助、共助、公助の精神が大事ですが…」

と書いていましたが、本当にそのとお  
りだと思います。本人も家族もピアサ  
ポートをやって、地域は「あそこにお  
かしな人がいる…」等とうわさをして  
いるのではなくて、日頃から「こんに  
ちは！」といえる環境をつくること。  
それでもできないことは公にお願いす  
る。その公の最後の砦だと思われる警  
察が今や24時間コンビニ化しています。  
多くの警察官の話を聞いて、警察官の  
平均寿命が短いと知り、このままでは  
県民の安全も危ういと感じました。

## おわりに

'98(平10)年夏、神奈川県警伊勢佐木  
署生活安全課長の五味さんに出会った  
ことで、私は患者等が警察署の保護室  
等で保護されていると知って驚きまし  
た。それをきっかけに、あちこちの交  
番や警察署の人に話を聞いたところ  
「精神の人の相談が多くて…」等という  
話を聞きました。

'99(平11)年5月、神奈川県警本部生  
活安全総務課の山口さんを訪ねて「警  
察と精神障害者の関係」を聞いたとこ  
ろ、「所轄警察署にいた時、多くの患者  
さんやご家族がみえましたが…」と絶  
句され、なんで保健所や医療機関でもな  
い警察に患者や家族が行くのか？ と  
私は不思議に思いました。

横浜市消防局救急課を訪ねたら、「救  
急隊も精神障害の人は受診先がなくて  
困っている」と言います。そこで救急  
課の吉村さんと2人で県警本部に山口  
さんを訪ね、3者で意見交換しました

が、あらためて“24時間精神科救急相  
談窓口”や“24時間救急医療”がない  
ことで、患者も家族も救急隊も警察も  
困っていることがはっきりしました。

神奈川県と市民団体との話し合いの  
席上で、私はそうした事実を発言し続け  
てきたら、2000(平12)年に“神奈川県  
精神科救急医療システム検討会”がで  
きました。私は「多くのニーズを発言  
したいので、検討会に入れてほしい」  
と県に言いました。その頃「県警の山  
口さんが“検討会に救急医療のニーズ  
を持ったコンシューマーや家族を入れ  
るべき”と県にアドバイスした」と関  
係者から聞きました。しかし県は、ソ  
フト救急のニーズを持った人を検討会  
に入れませんでした。

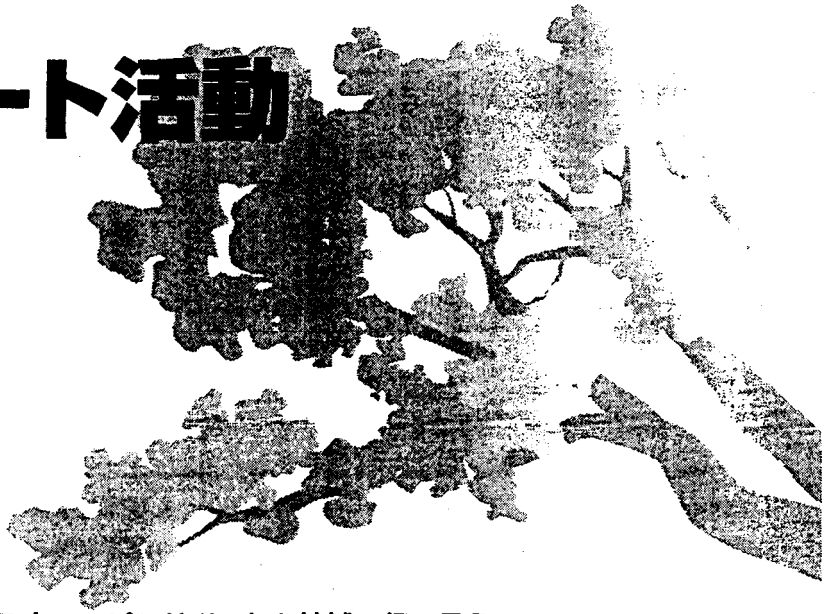
2002(平14)年4月1日から、神奈川  
県・横浜市・川崎市は、ハード救急を  
24時間システムにします。ソフト救急  
は24時間対応にならずにハード救急だ  
けが始まることになりました。これは  
風邪をこじらせ、肺炎にならなければ  
受診できないことと同じで、県民にと  
って人道上の問題だと思います。

そして編集後記にも書きましたが、  
警察とマスコミと精神障害者の不幸な  
関係の解消になるわけでもありません。  
1日も早く24時間安心して利用できる  
精神科医療が必要です。

(ひろた かずこ)



# 私のピアサポート活動



## 広田和子

精神医療サバイバー&保健福祉コンシューマー



社会のなかで生きづらさを感じている人へのピアサポートを地域で行い見えてくるのは、横並びの人と人としてのつながり、信頼感によって心を開ける相手がいることの大切さだ。サバイバー&コンシューマーの視点からの報告。

### はじめに

精神科救急のテーマでピアサポートを書くにあたりまして、この文章のなかでいうところのピアや、これから使用するカタカナの用語について私の体験に基づいて私見を述べます。

かつて私は入社拒否という状態で、社会のなかで孤立しているという自覚もないまま精神病院を利用しました。

5年後に医療過誤の注射を打たれたためにその副作用で緊急入院を体験し、退院後も多量の薬をのまないで一睡もできず、薬をのんでも音がすれば眠れないという、“精神医療を利用したため” 障害者にされました。このように遅れている精神医療でつらい体験をし、地域社会へ生還し、社会的復権を果

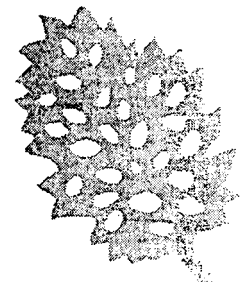
たせた者として、私は「精神医療サバイバー」と名乗っています。

「保健福祉コンシューマー」とは、保健所や作業所、生活支援センター等の社会資源や精神障害者のためのサービスや制度の消費者および消費経験者のことをいいます。私は精神病院へ通院後、保健所の“生活教室”へ週一度通所したり、病院を退院後、作業所のメンバーになったり、2年前からは“横浜市精神障害者住み替え住宅制度”を使っていますので、この呼称をつくり、使用しています。

この呼称をつくったきっかけは救急車等で安心して利用できる“精神科救急”の24時間システムを早期に実現してほしい等と横浜市障害者施策推進協議会のなかで発言していたことでした。

そのときの私の発言が職員の意識を変えてしまうほどの影響力だということで、ケアマネジメント専門委員会の委員選考から私が外されたことと横浜市の関係者から聞きました。そこで、委員に選ばれた人に、数回開かれる委員会に2、3回私を出させてほしいとお願いしたところ、ものすごい剣幕で怒鳴られ、その人に怒鳴られて自殺した仲間の亡霊が決まって真夜中の3時に出て、3回短期入院したほど体調をくずしました。

こうして患者会のなかでもつらい体験をした私の考える“ピア”は単に精神障害者にとどまらず、社会のなかで生きづらさをもっている“社会的障



者”または生きづらさを感じている人と捉えています。

## 不登校だったE君は…

’99(平11)年12月8日に横浜市内の教職員400人に講演したあと、ある女性教師から「息子が不登校で…」という相談電話を受けました。私は「息子さんと一緒にちゃんこ鍋でも食べませんか」と提案しました。

当時12歳のE君が両親とともにやって来ました。ちゃんこ鍋を食べながら、テレビ番組の“はみだし刑事純情系”の話でE君と私は意気投合しました。「“はみだし”のビデオがあるから泊まり込みで見に来ない？」と私が言うと、E君は「はい。広田先生」と言いました。母親から「Eは強迫神経症で、汚いと思った瞬間にお風呂に入るのが」と言われたのですが、私は「何度でもどうぞ」と答えました。

E君が泊りに来た日、2人で“はみだし”のビデオを5本見て「…どうして強迫神経症になったの？」と聞くと、「学校で嫌いな女の子がいじめられていて、嫌いだけれどいじめはよくないと思っていたら、学校に行けなくなって…」とE君は語りました。その時点でE君は精神科からでてくる薬をのんでいました。E君は我が家でテレビをつけられなかったし、冷蔵庫も開けられなかったけれど、一度もお風呂には入りませんでした。

翌日「世界一おいしいさば寿司を食べに行こう」と言って、おなじみのお寿司やさんへ一緒に行き、さば寿司を食べると「…本当に世界一のさば寿司ですね」とE君は言いました。

そして六ツ川交番へ寄って「F君！この子“はみだし刑事”の大ファンなので握手してあげて」と33歳のF警官にお願いすると、「こんにちは！Fです」と言って握手してくれて、E君はニコニコして帰って行きました。

その後、E君は何度もさば寿司を食べに来て、フリースクールへ通いだし、2001(平13)年4月から学校へ復学したので、E君一家とちゃんこ鍋を食べる“復学祝い”をしました。

先日、E君は「強迫神経症の原因は家にあった。家がきれいなので、それが普通だと思っていた」しかし我が家が汚かったので、「これが普通なのだと思います」と話していました。なるほどそれで、E君は我が家でお風呂に入らなかったわけです。汚い連続性のなかにいたのですから。

E君は「日本の精神医療で心の病は治らない。大事なのは何が原因でこうなったのかよく考えることです」と語りましたが、私もサバイバーとして同感です。今、E君は来年の高校受験めざしてガンバッテいます。

## 夜遅くかかってくる電話ほど深刻

夜遅くかかってくる電話ほど話の内容は深刻なものが多いと感じています。

G君は私を信頼して日頃から電話をくれる間柄。ある夜午前0時頃、G君の母親から「Gが幻聴がひどくて苦しいのですぐ入院したいといっています。…〇〇病院へ電話をしましたが当直の先生は寝ているといわれた」とのこと。

私は母親に「G君にかわってください」とお願いすると、G君がでたので「大変だけど、今晚はもうどこも診てくれるところがないので布団をかぶって幻聴と話し合うか、闘ってほしい。そして明日、病院が保健所へ自分のつらさを訴えて…」と話したところ、G君はその後、自分の意思で通院先の病院へ入院しました。

## ピアサポートは重要な活動

今回、私がここでご紹介したピアサポートは自宅におけるマンツーマンのかかわりです。患者会のことにも冒頭でふれましたが、私自身は現在もその患者会に所属しているし、今後もやめる気持ちはありません。人が集まればいろいろな問題が発生します。そのなかで集団だからこそより孤立感を感じることは誰にもあるでしょう。そう感じるからこそ、マンツーマンのピアサポートが重要だと、かつて社会のなかで孤立しサバイバー&コンシューマーになった者として捉えています。

(ひろた かずこ)



広田和子 精神医療サバイバー&保健福祉コンシューマー

(このコーナーは上野容子さんと広田和子さんが交替で担当しています)

## 池田小児童殺傷事件取材を受けて

2001(平13)年6月8日午後、2日前に亡くなった母のお通夜の打ち合わせをしていると、神奈川新聞のA君から「大変なことが起きましたね」という電話が入った。私が「何があったの?」と聞くと、「知らないんですか。大阪の小学校に精神障害者が乱入して生徒を刺傷したと今テレビでやっていますよ」と言われた。

急いでテレビをつけると、その時点で5人も幼い子どもさんが亡くなったことを知り、言葉が失った。A君に「ごらんになりましたか?」と聞かれたので、「こちらは大変なのよ」と言い、母がおととい亡くなったとつげると、A君は間をおいてしんみりと「それはご愁傷様です。お通夜が告別式にお焼香させていただきます。…このような時に申し訳ありませんが、どうしても広田さんのコメントをいただきたいのですが…」と言った。A君とはよく精神障害者の事件報道のあり方とか精神医療保健福祉の業界のことなどを話している。「マスコミは権力だから」と言う私に「マスコミは権力だけど私は無力感を感じています」とA君は本音を語る間柄。A君に私は日頃考えている普遍的な話を手短にした。

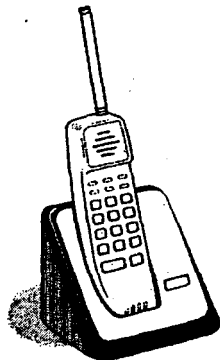
その後、お通夜をはさんで産経新聞のB君から電話が入ったので、神奈川新聞にコメントしたことと同じ話をして、「念のため記事になる前に私のコメントの部分を知らせてほしい」とお願いした。

B君の返事を待っていると、今度は朝日新聞のCさんという人から「うちの〇〇の紹介で、ぜひ広田さんのコメントが…」と電話が入った。私はまた同じ話をして「記事になる前に知らせてほしい」とお願いした。

B君の電話で翌日のコメントの確認がとれ、

弟が「帰ろう」と言ったので、私は明日の告別式のため乗をのんで寝なければいけないと思って、弟に送ってもらいドラマのような1日を振り返っていると、朝日新聞のCさんから「うちの社は匿名報道をしていますので、広田さんのコメントは使わせていただかなくてもよくなりました」という電話が入った。

翌9日、母の告別式の日、神奈川新聞と産経新聞にコメントが載ったことをA君とB君の電話で知った。告別式を終えて初七日の法事もすませて家に帰り一休みしていると、朝日



新聞のCさんから「…うちも実名報道でしたので、昨日の広田さんのコメントを使わせていただきたいのですが、広田さんが『医療的保護を受けながら起訴され裁かれない』と言ったところに、デスクが『被害者の感情に配慮して』と手を入れたいと言っているのですが、よろしいでしょうか」と電話が入った。

「…おたくは朝日新聞じゃないのですか。私は他の病気と同じように、と言ったんですよ。デスクに言ってください。いつから朝日は週刊誌みたいになったんですか。もしどうしてもデスクが手を入れるのなら、私のコメント

は使わないでください」と言ったところ、夜遅く「デスクが広田さんのお話を了解しました」とCさんより電話が入った。

Cさんと激しいやり取りがある前に、11年間交流のある東京新聞のD君から電話が入った。私は長年の親しさから「…精神障害者の施策について国に謝罪してほしいと思っている…」とコメントにつけたした。

そのことを精神医療保健福祉業界人ではない親しい人に話したところ、「広田さん! 今、謝罪されるのは被害者ですよ! 広田さんの気持ちは理解していますが、今はその時ではない。世論を敵に回してしまいますよ」と言われた。私はそのアドバイスを受けてD君に「国の謝罪のところをカットして!」と電話を入れると、D君は「だって、広田さん! 国はハンセン病の人たちに謝罪したじゃないですか。カットしなくてもいいんじゃないですか」と言った。私は「さすがD君! 全くその通りなんだけど、今はタイミングがよくないよ。時間をおかなければ」と言うと、D君は「わかりました」と言った。

そして日本テレビの収録やアエラ、産経新聞のロングインタビューに応じたり、読売新聞の取材や毎日新聞にもコメントを求められ、それらの一つひとつに丁寧に対応したが、遠方の毎日放送や「SPA!」はお断りした。

その後、厚生労働省より「法務省との重大事件を起こした精神障害者に関する合同検討委員会」の参考人として招かれ、サバイバーとして決死の覚悟で発言する決意をしたが、多くのさまざまな立場の人のいろいろな反対等にあい参考人を断念した。参考人として発言したかったことは今後、文章化していきたいと思っている。

## ピアサポートの現場を訪れる人々

私は'99(平11)年8月から横浜市精神障害者住み替え住宅制度を利用して現在の家に住んでいる。家賃は8万円で、そのうち5万3700円は生活保護で、残金は横浜市衛生局から大家さんの口座へ直接振り込まれる。

昨年6月6日に入院中の病院で86歳の人生を閉じた母が、精神障害者の私としか同居できないという状況のなかで探した家だった。不動産屋の小林さんはさっぱりとした女性で、他人のうわさなどはせず、私は時々店の前を通ったときに寄っていろいろな話をしている。

我が家には、仲間たちやご家族もよく来るし、さまざまな立場の人の訪問も絶えない。この家での相談活動を最初に視察に来たのは、当時横浜市精神保健福祉課長だった大森さんだ。引っ越してちょっと落ち着いた秋のある日曜日に、相談者たちとのいつもの待ち合わせ場所である六ツ川交番で待ち合わせた。

大森さんはその日に勤務していた「コンちゃん」こと近藤巡査部長に「大森と申します。こちらで広田さんがいつもお世話になっているようで…ありがとうございます」とあいさつした。コンちゃんは「…ご丁寧にありがとうございます」と答えた。この光景は貴重なことだと私は受けとめ、以後、相談者以外の人も交番の勤務者に紹介している。

家に到着した大森さんは、6畳2間と4畳半1間と広い廊下を見て「…住み替え住宅制度でこんないいところが見つかってよかった」と言ったので、私は「精神障害者にとって住宅施策は重要で、住み替え住宅制度はとても貴重な存在ですよ」と答えた。

大森さんは母に「広田さんがガンバッテやれるのはお母さんのおかげでもありますので、私からもお礼をいいます」と言った。そして私の活動を大森さんが手短かに説明したが、大森さんが帰ってから母は上機嫌だった。

2001(平13)年1月には、レビュー37号のコミュニティショットにも登場した神奈川県警南署生活安全課長だった長塚さんが家に来た。精神保健福祉法24条(警察官通報)不受理となったA子さんのことで保健所へ相談したが何の進展もなく、困っていた警察が相談した相手が私で、A子さんの件は長塚さんと私のチームサポートで解決した。

長塚さんはその時に「今度、広田さんのお宅を訪問しないとイケませんね。A子さんをはじめとした多くの人々が相談に訪れているわけですから…。六ツ川交番の人たちにも私からきちんとお礼をいわなければ…」と言った。

精神障害者の地域での生活を知ってもらうのは大事なことだと思ったので、「明日の夜、記者たちが精神科救急の勉強に来ますので、ぜひおいでください。そして、警察の現場ならではの話をしてください。それが県民のためになりますから」と私は言った。

長塚さんは「そうですね。当直の時に署で記者たちといろいろ話していますが…自宅で相談を受けている広田さんと私のような立場で記者に会うのは貴重なことですね。我々が知らないうちに精神障害者の人たちの人権を侵害しているかもしれませんし…」と言った。

翌日六ツ川交番で待ち合わせた時には、残念ながら勤務者は不在だった。

その日、私たちは、「24時間精神科救急相談窓口」も「精神科救急医療システム」もないために患者、家族も救急隊も警察も困っていることなどをそれぞれの立場で語り合った。

それが後日、産経新聞の記事につながり、読者の反響がすごくて、支局に私の電話番号をはりだしたり、また議員たちからの問い合わせもあり、県議会で知事に質問する議員も出た。

今年1月19日には厚生労働省精神保健福祉課の松本課長が「現場をぜひ見たい」と視察に来た。待ち合わせはいつもの六ツ川交番で、その日勤務についていた北見巡査部長に、松本課長は大森さん同様、名刺を渡してあいさつした。家に着くと、私は隣の畑を手入れしている服部さんを招いて、「服部さんが私の留守に家をあけて風通しをしてくれたり、郵便物や新聞を取っておいてくれ、本当にしてくださって…」と松本課長に話した。すると、松本課長は「いつも広田さんがお世話になっていてありがとうございます」と言った。服部さんは「広田さんは自分では「精神障害」って言っていますが、明るくてまったく普通の人なんですよ」と答えた。

その時、神奈川新聞で精神科救急を何度も記事にした佐藤記者から電話が入ったので、「今、厚生労働省の課長がみえているから、よかったら来れば」と言うと、飛んできた。服部さんは帰り、3人でいろいろ話している間にも遠方から相談電話が入った。佐藤記者は「地方紙の記者が国の課長から直接貴重な話を聞いてよかった。また会えれば…」と言っている。



## 広田和子 精神医療サバイバー&保健福祉コンシューマー

### 隣組長体験記

昨年4月1日から今年3月末まで、私は横浜市南区六ツ川1丁目2班13組の組長を務めた。引っ越しして間もなかったのに、隣組の人たちがどのような考えを持っているのかわからなかった。しかし、精神障害者としてカミングアウトしながら生活している私が、組長をやらないのは、特別視していただきたいことになってしまうので、やってみようと思って引き受けた。

ところがである。これがとてもおもしろいというか、大変な体験になった。組長の仕事はまず組長会議からデビューする。会議開始時間は午前10時30分。場所は自宅から徒歩3分のところにある町内会館。

そこで私は考えた。私の起床時間はだいたい11時30分頃である。組長会議に間に合わせるため、いつもより就前業を早くのんで会議に最初から参加するか？ 普段どおり薬をのんでマイペースで起きて遅刻して会議に参加するか？

私は後者を選んだ。隣組の人たちは私が起きられないことを知らないが、前から同じ生活圏に10年以上住んでいるので、「六ツ川交番のお巡りさん」や、商店の人たちは私が起きられないことを知っている。

それが私の生活のしづらさ(生活障害)なのだから…。精神障害者としての。会議の日、私はいつもどおり、11時30分ぐらいに目が覚めた。さっと身支度して町内会館へ…。

会館の戸を開けながら私は「おはようございます！ 精神科の薬をたくさん飲んでいますので今起きました。遅れて申し訳ありませ

ん！」と大声で言った。会議に参加していた新しい組長さんがいっせいに後ろを向いて私を見たので、私は「どうもすみません！」と言って中に入って、座ったら会議が再開した。こうして私の組長体験がスタートした。

そして、その日預かった帳面を元に町内会費の集金をしようと思って、近所の人に「会費をめんどうなので1年分払ってもらおうと思う…」と話したら、隣組の人たちが「冗談じゃない。1年分払ったあと死んだらどうなるのよ」と怒っていることを知らされた。

だから私は、毎月集金するほうがいいのかと思って隣組を回り始めたら「1か月ごとじゃなくていいのよ。半年分払うわよ」とけるっとしている人も多い。そしてアパートの住民さんは「ほら、一軒家に住んでいるわけでもないし、いっぺんに4800円(400×12)はちょっと負担なのよね」と本音を語っていた。

秋に入って横浜市交通災害保険申込用紙が割りあてられたので、回覧板につけて、「保険に入られる方は電話ください」と私の電話番号をいっしょに書いて回した。

すると今度は近所の人から「みんなが怒っているわよ！ 電話をかけさせようとしているって。私だって一軒一軒まわったのに！」とお叱りの電話が入った。私は「どうもありがとうございます。一軒ずつまわります」と答えて受話器を置いて、思わず笑ってしまった。けなげというか、みんなで大変さを引き継いでいるというか、ワイドショー的というか、こっけいというか。こんなことが重なって、私は隣組の人たちと何度となく会話をするなか

で、愛すべき善良な住民だと感じた。

この他に組長の仕事として毎月、県のたよりに、広報よこはま等をセットにして一軒ずつポストに入れて歩く。その時も私は声をかけて入れるようにした。すると、隣組の人たちのなかで大変な病気をした人の闘病記についても話してもらって、私が「そうでしたか、私のまわりの精神障害者も苦しんでいる人がたくさんいますが、大変なのは私たちだけではないですね」というと、「そうよ、世の中には大変な人がいっぱいいるのよ」「がんばって」と激励された。



※コミュニティショットは今回が最終回になります。次号から広田さんの新連載「精神障害者からみた人々」が始まります。